

天気予報と傘

(厚生労働統計通信第 12 号掲載)

天気予報

日本の新聞やテレビの天気予報では必ず「降水確率」が示されている。多くの日本人は、雨が降ると傘をさして歩く。しかし、国によっては、雨が降っていても濡れたまま平気で歩くのが普通のところもある。雨が降ってきて濡れてしまうことを気にする程度は、国によって、人によってずいぶん違う可能性がある。

「雨に濡れてしまって、風邪を引くのがいやだ」、という人、「大切な服（ヘア・スタイル）が雨に濡れると台無しだ」という人は、天気予報の降水確率を気にするだろう。一方、「わざわざ傘をもって行って雨が降らなかったら馬鹿馬鹿しい」、という人や、「雨が降ったらそのとき使い捨ての傘を買えばいい」という人は、降水確率が相当高くないと傘を持ち歩かないだろう。

危険回避度

「傘をもって出かける最低降水確率」は、人々の危険回避度の大きさを表すと考えられる。雨に降られて損害を受けるかもしれないリスクをどれだけ嫌うか、というのが危険回避度の指標である。経済学では、危険回避度という概念は非常に重要である。たとえば、株式と安全資産をどのような比率で保有するかは、危険回避度の大きさに依存してくる。職業選択においても、自営業の方が所得の不確実性が高いとすれば、自営業の人は雇用者に比べて危険回避度が低いはずである。逆に、危険回避度の高い人は、失業のセーフティネットに対する需要も高くなるはずである。危険回避度が高い人は、そもそも失業の可能性を低めるためならよろこんで賃金カットを受け入れるであろう。

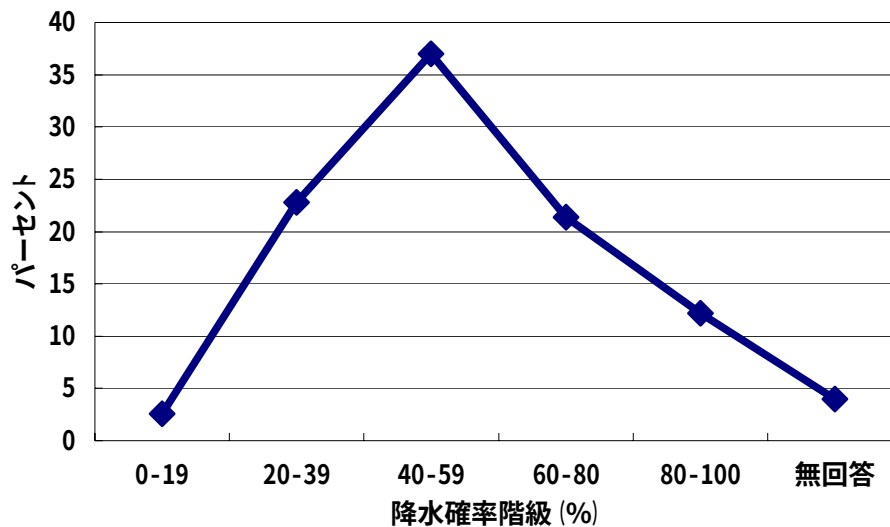
それでは、「傘をもっていく降水確率」という危険回避度の指標は、そのような人々の経済行動をうまく説明するだろうか。私自身が 2002 年に行ったアンケート調査（「くらしと社会に関するアンケート」）をもとにその結果を紹介しよう。（アンケートの概要は <http://www.iser.osaka-u.ac.jp/~ohtake/> をご覧頂きたい）。アンケートは、郵送法で行い、6000 名に対して送付し、約 2000 名から回答を頂いた。

傘をもって出かける降水確率

私が行ったアンケートでは、「あなたは普段お出かけになる時に、天気予報の**降水確率が何%以上の時に傘をもって出かけますか。**」という質問を行い、その降水確率を 0 から 100% の範囲で答えてもらった。もちろん、最低降水確率が**高い人ほど、危険回避的ではない**、ということを意味している。

図 1 は、横軸に傘をもって出かける最低降水確率の階級を示し、縦軸にその回答者の比率をとった分布を示している。平均値は約 50% であり、きれいな山形の分布となっている。この分布をみて、意外に思われた方も多いかもしれない。日本人でも傘をもって出かける態度にこれだけの差がある。

図1 傘をもって出かける最低降水確率の分布

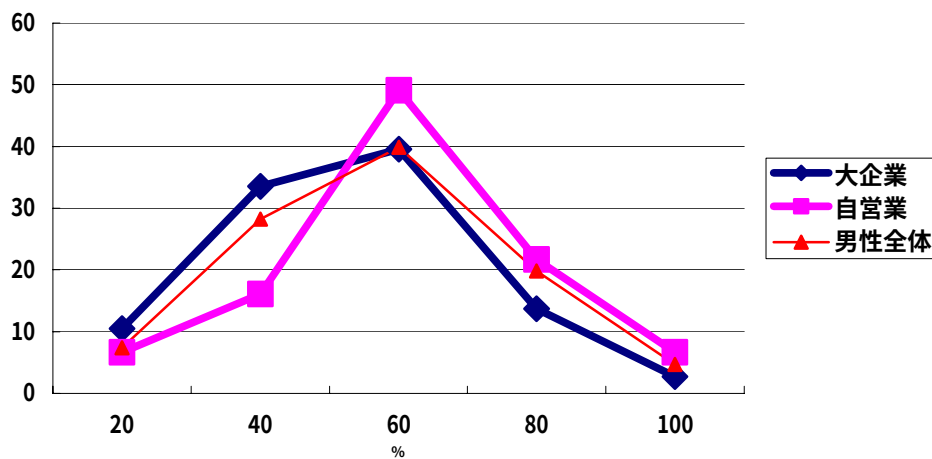


出所「くらしと社会に関するアンケート」（２００２）より筆者が作成

職業選択

男性について 1000 人以上の大企業の雇用者と自営業で、傘をもって出かける降水確率の分布を比較したのが、図 2 である。やはり自営業の方が危険回避度が低いといえそうである。ちなみに、女性には、大企業雇用者と自営業の間で分布に違いはない。

図2 傘を持って出かける降水確率と職業



ワークシェアリング

私はこの傘の指標をつかって、人々の所得再分配に対する好みやワークシェアリングに対する好みを統計的に説明するモデルを推定してみた。詳細な結果はここには示さないが、降水確率が低くても傘をもって出かける人ほど、所得再分配政策を望み、解雇よりもワークシェアリングを支持していることが明らかになった。日常的な行動様式を示す「降水確率と傘」の関係から、人々の社会に対する選好まで明らかにできるというのは、統計分析の醍醐味だと私は考えている。